

日本近現代医学人名事典 別冊

【1868-2019】増補

泉 孝英【編】

評者

富岡洋海

神戸市立医療センター西市民病院副院長／呼吸器内科

今夏、泉孝英博士の編による『日本近現代医学人名事典別冊【1868-2019】増補』が出版された。本書は、第26回矢数医史学賞を受賞した『日本近現代医学人名事典【1868-2011】』（医学書院、3,762名収載）の増補版として、平成24(2012)年以降、令和に改元されるまでの2019(平成31)年4月末までに物故された564名と、前著に追加すべき369名を加えた933名を収載した膨大な人名事典である。総勢5,000名弱の業績がひとつなぎになったこととなる。

書物の性質として、事典の類に「書評」というのも、おかしな話と思われるかもしれないが、本書は単なる人名事典ではない。これには、明治・大正・昭和・平成の約150年間におけるわが国の医学・医療の歴史を残し、よりよい未来につなげたいと念ずる編者の思いが詰まっているからである。

まず、特筆すべきは、医療職としての（基礎研究者を含めた）医師、歯科医師、看護師、薬剤師、療法士、検査技師のみならず、関連する法律家、行政官、政治家、建築家、文学者、哲学者、患者も含めた福祉活動家など、幅広い人選が識者の眼によってなされていることである。あらためて、医療とい

うものがさまざまな分野の多種多様な方々のご尽力で成り立っていることを認識させられる。そして、各故人の記述に関しても、学歴、職歴、業績、関連書籍に加えて、留学先も含めた指導教官、上司、血縁者や婚姻関係などの記録もあり、人と人とのつながりもまた、医学・医療の発展には重要であることを教えてくれる。さらには、付録として、膨大な参考文献・資料、年表、書名索引、前版も含めた人名総索引が掲載されており、この事典の将来にわたる価値を確かなものとしている。

このようなまさに歴史的大著の書評を、若輩者の私が記すのも恐れおおいが、あえて戦争を知らない世代として述べておきたい点は、所々に記されているその戦禍の跡である。激動の時代にあつて、故人たちが軍医や従軍看護師として出征された戦地や、関わった軍事作戦、海軍では乗船戦艦名までが記載されており、故人らはさぞかし、誇り高く、天国から編者に感謝されているであろう。

一方、彼ら彼女らが捕虜として収容された収容所や戦死の記録、そして、若くしての「原爆死」という文字を見つけるにつけ、戦時下であってもわが国の医学・医療

を支えていただき、そして悲運にも逝かれた先人たちの生き様を、本書は静かに語りかけている。

私がもう1つ挙げるとすれば、専門領域として「ハンセン病」が記された肩書きを持つ多くの故人の存在である。そこでは先に述べたとおり、医師、看護師のみならず、患者も含めたさまざまな分野の方々がこの悲しい歴史の証人であることがわかる。ハンセン病の貴重な史料が失われつつある今日、本書の意義は極めて大きい。

最後に、単なる事典を超えた価値として、「別冊の序」に記されている平成時代の医学・医療の光と影、そして、新型コロナウイルスに翻弄される今日から未来に向けての熱いメッセージは、齢80を過ぎなお自らの膨大な数の先人たちの足跡をたどられている編者だからこそ書ける深い内容となっていることをお伝えしておきたい。

A5判・256頁

2021年5月

定価：3,960円(本体3,600円+税)

[ISBN978-4-260-04261-1]

医学書院刊

